

に厚く、昔からの伝統を受け継いで、八幡神社を当番制で毎日天候の如何にかかわらず参拝と清掃を欠かさないらしい。この八幡宮の東部には、圃場整備事業の一端として、農村公園が見事に新設され、学童や幼児の遊び場として、また老人クラブのゲートボール場として大いに利用され活用されている。

この村落での一番の悲劇は、昭和二十年八月五日午後八時頃アメリカ空軍より受けた焼夷弾攻撃である。被害を受けた家屋と人名は左記の通りで、ほとんど全焼であった。

富吉政一・石丸六次・山口平八・高松秀次・山口金吾・石川虎六・古川 明

この時B 29の約一〇数機の編隊は、中村の西南方面より飛来し来り、東与賀小学校の方向へ去ったので多分学校を軍需工場と見て、襲いかかったのであろう。ボタンの押し方が多少早かったためか、風速や高度のため何等罪もない中村の民家に焼夷弾が落下したのである。焼夷弾の型は六角型で長さ約四〇センチ、下方に数本の木綿の布がつけられ、さかさまに落ちない工夫がしてあった。この空襲の数日後に村人が不発弾を一カ所に集めて無断立ち入りを禁じていたが、八月八日のこと当時一五歳の少年が石畳の上で叩いたため破裂して即死し、その側で遊んでいた少年二名も片眼を失明したのである。今にして思えば本当に残念で気の毒なできごとであった。

一六 住 吉

住吉は東与賀町の中央より少し南部に位置して、北は町道を隔てて中村と境し、西側は大きい縦堀を境に大

野に面している。現在では緑野美田に包まれた農村であるが、住吉神社の由緒にもあるように、この地域一帯は昔の有明海岸であつて、水が澄んでいるところに青い葉っぱの芦が繁茂していた。このことから今日の「住吉」の地名が生まれたそうである。神社の直ぐ北側を東西に走る道路は「裏ん土井」と呼ばれ、昔の土堤の一部だった石垣も残っており、その由来も証明されるのである。

昔は純農村でほとんどが農家ばかりであつたが、漸次に漁業も増し商業その他の職種も増加して町内でも屈指の村落に榮えていった。現在における世帯数及び職種は次の通りである。

職業別	住吉東		住吉西		総計
	住吉東	住吉西	住吉東	住吉西	
農業	三四	三一	六五		
水産業	一一	四	一五		
建設業	七	一	八		
製造業	四	一	五		
卸小売	六	三	九		
金融・保険	一		一		
運輸・通信	二	一	三		
電気・ガス・水道		一	一		
サービス業	四	五	九		
公務員	二	二	四		
無職・不明	五	四	九		
合計	七六	五三	一二九		

この村落の特徴も産土神としての住吉神社を中心に、住民が和衷協力して、産業振興や文教厚生に努力したことである。即ち文教方面では明治初年には寺小屋の私塾があり、わが国の教育令発令前すでに、学校らしい教育の場が展開されていたのである。通称を「やつすん学校」と呼んだが、現在の石丸卯助の自宅がその跡であった。

産業面では何としても農業が主体で、一戸当たり耕作面積平均して一八〇アを越えており、本町内でも中村に次いで多い方である。それだけに農業技法に関しても研究熱心で、昔から螟卵採集・深耕(馬使い)・機械灌漑・麦

踏み・株切り等、個人でも共同作業も極めて熱心であった。

住吉神社

このお宮は住吉村のほぼ中央に位置しており、東与賀における村社の一つである。祭神は表筒男命・中筒男命・底筒男命の御三体を祀り、神殿・中殿・拜殿も堂々として一八四坪の面積を持ち、さすがに村社としての風格と規模を具備している。現在の場所に昔は大明神として、建坪七坪位の小さい庵があった。今もその前の民家を「庵の前」と言うそうである。神社の直ぐ北側の道路を「裏ん土井」と呼び、昔の一部の石垣も残っている。明治十四年二月この村の辻忠六(演年)が神社並びに石垣等一式を寄付すると言い出したので、村人は協議をなしその結果、この神社の改築となったのである。それを機会に村の名を冠して「住吉神社」と銘名したのである。

住吉神社の神典(御神徳)について、佐賀市北川副町粟島神社宮司は左記のような記録を保存している。

住吉の神は底筒男の神・中筒男の神・表筒男の神と言う河川の表面・中程・底部の守護神とされている。神典によればイザナギの尊が筑紫の日向の橘の小戸阿波岐が原で、禊された時に生まれました神とある。そのミソギの結果、天照大神以下三貴子の御出現を仰いでいる。右によれば前半は住吉の神は禊祓の神であり、後半は禊祓によって皇祖神を出現させる役割の神となっている。ここに住吉の神の真の信仰を見出す必要がある。

さて住吉を今の人はスミヨシと訓むが、古事記に「墨江」・撰津の国の風土記逸文に「須美乃叡」・万葉集には「清江」とある。古くは「スミノエ」と訓んだのである。「スミノエ」と言う意味は、万葉集(巻三)に「清江」

の岸の松原遠つ神我が王の幸行処とある様に、清(澄)の江で水の澄んだ海岸・河口を指したものである。即ちスミノエの神とは祭に際し清い海辺・水辺でミソギ祓をして潔斎する際の守神たる事を本質とする。

ミソギ祓は今では軽く考えられているが、古くはミソギ祓いする事によって心も身も生まれ替わる信仰がその底にあつたことを忘れてはならない。古典によれば「ミソギハラ」は「みあれ」の神事につながる。さればこそその結果皇祖神以下の三貴子のお出生を拝したのである。この海岸・河口における禊祓の信仰―これを媒介として人々の一層の新生を期待したこと。ここにこそ住吉の真の信仰があつた。それが海岸・河口に住む者の生命を守り、これに新しい息吹きを送り航海・漁業を守る神とされたのは、当然の成り行きと言つてよい。住吉の神の神社は摂津(大阪市住吉大社)長門(下関市住吉大社)筑前(福岡市住吉神社)壹岐(長崎市住吉神社)に存するが、それらはいずれも澄の江の名を冠するにふさわしい所である。全国の住吉神社はこのいずれからの分社であろうが、その禊祓による神の息吹きは人々をしていよいよ新生更生せずには措かないであろう。

さて現在の住吉神社の堂宇および境内は、佐賀市本庄町末次にある元船津の海の守護神を祀るのとはほぼ同様であるようである。

住吉
神殿の再建新築は、昭和五十二年八月一日―この佳き日に落成式を挙行した。その時の神官は佐賀市北川副町粟島神社の宮司宮田豊、総代は古川弥六・福井利八・野田清・光増久米次であった。その年の正月に御神体を北川副町粟島神社に一時遷座し、八月一日に新築成りし神殿に御帰還になった。その際は住吉に住む村の老若男女、小中学校の児童生徒たちまで沿道に並んで、御神体を歓迎した。総工費は一五〇〇万円、寄付金と各戸割り当て並びに特別寄付によって支弁した。

この境内は広く一對の狛犬（明治十五年十月天草市石工、橋口茂一）道祖命（明治十三年二月一日寄付者、芹田利平）首なし地藏（天保十三年寄進十名）献燈（二基明治三十六年九月吉日）手洗鉢（石垣式）辻忠六（演年）辻武一郎）の外幟立竿石（二基）等がある。珍しいのは明治三十八年戦役（日露戦争）に従軍記念の砲弾の塔があり出征した二十五名の従軍者の氏名が刻まれてある。更に広々とした境内には樹齢二五〇年と推定される見事な藤の大樹がある。この古木は本県の名木として指定を受けており、その他にも櫨けやき三本・どんぐり一本等これらも相当の古木で空高く生い茂っている。これらの古木と大樹は、朝な夕なこの宮に参詣する人々をして、自ら神霊のお加護に頭を垂れさせるに充分である。



観世音菩薩

一七 中 飯 盛

中飯盛は東与賀町では北西部の一番端に位置し、北は佐賀市本庄町上飯盛に西は西与賀町元相応に境し、南は下飯盛と相接している。現在の世帯数は五五、その半数が農業に従事し、公務員・サービスマン・建設業・運輸通信

その他卸小売等と終戦後の職種が大分変化している。

この中飯盛の由来について、古老の古川茂士（元東与賀村の助役）の談話を記述したい。

昔、有明海の干拓事業の際に、飯場（飯を炊いて多くの人夫に食べさせる場所）飯を盛る所）が三カ所次々にできた。その第一番目の飯場という意味で上飯盛、佐賀市本庄町、次の場所を中飯盛、三番目を下飯盛と呼ぶようになった由。この中飯盛・下飯盛と大野を併せて大字飯盛と称するようになったので、大野にもこの飯場があったとの説も残っている。この村落内の悟真寺は、山号を飯盛山と呼ばれるのもここに起因するものである。

伝説「辻城」の由来

中飯盛の南部の端に「辻城」と呼ばれる地所がある。いつの頃かは不明だが「辻栄助」の一族が住んでいた。この栄助じいさんは正直者の上に仲々の働き手で、毎晩毎晩この村落四五戸の周りを火の用心の拍子木をかちかちと鳴らし回ったのである。その謝礼として毎月の一日に各戸から白米を少しずつ集めて贈ったらしい。もともと栄助じいさんの家業は、竹皮草履や下駄の鼻緒作りであったが、よく売れて前記古老等幼少の頃は買いに行かされたと述懐する。その栄助じいさんの子に「吉次」という少年がいたが、大変な秀才で当時この村の「学友会」の世話をしたりみんなの面倒を見てくれて今でも忘れられないという。ところが何時とはなく栄助さん一家は佐賀市に転住され、相当に活躍しているとのことである。つまり「辻」という地主の家跡で、その屋敷の東北の隅に塔の形の墓石が残っている。この屋敷を中心に耕作田地を「辻城」と呼ばれているが、今日ではA氏の住宅が建っている。